様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月 ２３ 日現在

機関番号：２４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００１３１

研究課題名（和文）ポスト印象主義におけるユートピア芸術論に関する総合的研究

研究課題名（英文）Research on the theory of art on the utopique image in the Post-Impressionism

研究代表者
永井　隆則（NAGAI, Takanori）

京都市立芸術大学・美術学部／美術研究科・非常勤講師

研究者番号：６０２０７９６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ポスト印象派（ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌなど）が彼らの生きた時代や社会に疑問を抱き生きづらさを感じる中で、その解決策としてユートピアを求めて近代化の進むパリから逃れて、南フランス、ブルターニュ地方やタヒチ島で制作し現地の風景や事物に着想を得てユートピア絵画を構想した事を明らかにした。彼らが活動したのは19世紀末だが、19世紀初頭から始まった近代化の矛盾や弊害が表面化してきた正にその時、彼らがユートピア絵画を描いたことから、過去に描かれたユートピア絵画、文学や思想書と同様、ユートピアは社会との関係の中で構想され、その点で一見、社会からの逃避に見えるが一種の社会参加であった事が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ポスト印象派（印象派の後1880－90年代に展開した世紀末の芸術現象全般を指す）の中でもその出発点となった狭義のポスト印象派（セザンヌ、ファン・ゴッホ、ゴーギャン）において、ユートピア芸術論が一種の共同作業として形成されたのではないかとの仮説に立って、新古典主義の「集団美学」を否定したロマン主義以降、専ら「個性」や「独創性」の追求として語られてきた近代主義（modernism）の言説、換言すれば「個人主義美学」の言説に疑問を投げかけ、3人の画家のみならず世紀末の近代美術の展開においてユートピア芸術論という「集団美学」が大きな役割を果たしていたことを明らかにし新しい近代芸術論の可能性を提唱した。

研究成果の概要（英文）：The Post-Impressionists (such as Van Gogh, Gauguin, and Cezanne) sought utopia as a solution to their doubts and discomfort with the times and society in which they lived. Escaping from the advancing modernity of Paris, they sought inspiration in the landscapes and objects of southern France, Brittany, or even Tahiti, where they conceived utopian paintings. Though they worked in the late 19th century, their creation of utopian paintings coincided with the emergence of contradictions and negative consequences of modernization, which had been brewing since the early 19th century. This suggests that, like utopian paintings, literature, and philosophical works of the past, utopia is conceived within the context of society. While it may seem like an escape from society, it is in fact a form of societal engagement.

研究分野：美術史

キーワード：ユートピア芸術論　ポスト印象主義　セザンヌ　ファン・ゴッホ　ゴーギャン　シャヴァンヌ　近代化　アンチ・モダニスム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ポスト印象主義という言葉を最初に使ったのは、1910 年、ロンドン、グラフトン画廊で、「Manet and Post-Impressinonistes」という展覧会を企画して、マネを起源とするセザンヌ、ファン・ゴッホ、ゴーギャンの革新的絵画の動向を紹介した、画家で美術批評家のロジャー・フライ(Roger Fry）であった。フライは、彼らの達成を、「造型」（design）と共に、そこに内在する表現(expression)に見出した。ほぼ、同時期に、ハインド（Hind）は、「Post-Impressionism」という著作を発表したが、ハインドは、印象派までの伝統的絵画が、「再現」を目標としてきたのに対して、ポスト印象派は「表現」という新しい目標を掲げたとして、ポスト印象派を定義した。その後、ジョン・リウォルド（John Rewald）が、実証主義に基づく調査を行って、画家達の活動史、交流史を明らかにした著作（John Rewald, *Post-impressionism From van Gogh to Gouguin*(1956）,The Museum of Modern Art, New Yorkm 1978)を発表して以後、Post-Impressionism という概念は、印象派の後に 1880 年代半ばから世紀末まで展開した様々な主義主張（新印象派、ポン＝タヴェン派、ナビ派、素朴派、象徴主義）を漠然と総称する言葉として使われてきた。

例えば、最近の二つの事例を挙げておく：

―Guy Cogeval, *Les années post-impressionnistes,* Nouvelles Ēditions Française,Paris, 1986.

―「オルセー美術館展 2010　「ポスト印象派」」国立新美術館、2010 年 5 月 26 日―8 月 16 日。

しかし、「ポスト印象派」という、漠然とした概念によって多様な主義主張を括りながら、それぞれの具体的活動が明らかにされるだけで、その美学的統一性に関しては、フライやハインドの規定を越える議論がなされているとは言い難く、とりわけ、ポスト印象派の中でも、印象派を経験した後、印象派を否定して新しい道を開拓していった狭義のポスト印象派（セザンヌ、ファン・ゴッホ、ゴーギャン）の思想的連帯、芸術論的共同作業に関しては、これまで誰一人として、問題として取りあげて来なかった。その最大の理由として、ボードレール(Charles Baudelaire)以降、「個性」や「独創性」が前衛近代美術運動において、追求すべき最大の価値観であったとの前提に立って、美術史家達が、専ら、画家一人一人の個性的特徴を記述することに専念してきたという事情がある。しかし、果たして、こうした「個人主義美学」のみで、セザンヌ、ファン・ゴッホ、ゴーギャンの芸術活動を理解しうるだろうか？彼らが、集団として、印象派から区別されるには、単に 3 人とも印象派を経験した後それを乗り越えたという共通性を持つということではなく、彼らの芸術的、思想的連帯が当然、想定されるはずで、彼らが「集団美学」を共有していたとすれば、それは一体、どのようなもので、どのように形成されたのか？これが、本研究開始当初の核心をなす問いである。

２．研究の目的

ポスト印象主義（本研究では、印象派の後、1880－90 年代に展開した世紀末の芸術現象全般を指す広義のポスト印象主義ではなく、いずれも印象主義を学びながらも、やがて、印象主義に不満を抱いて乗り越え、それぞれ独自の芸術を確立した 3 人の画家、セザンヌ、ファン・ゴッホ、ゴーギャン、という狭義のポスト印象主義を指す）において、ユートピア芸術論が一種の共同作業として形成された事を明らかにする事で、新古典主義の「集団美学」を否定したロマン主義以降、専ら「個性」や「独創性」の追求として語られてきた近代主義（modernism）の言説、換言すれば「個人主義美学」の言説に疑問を投げかけ、セザンヌ、ファン・ゴッホ、ゴーギャンという狭義のポスト印象主義を事例にしながら、世紀末の近代美術において「集団美学」が大きな働きをしていたことを明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、印象主義の実証主義世界観に対抗して、3 者が連帯して「ユートピア世界観」を形成したのではないかとの仮説に立って、以下の諸点を以下の研究方法で明らかにする。

①　セザンヌが南仏エクス・アン・プロヴァンスでユートピア芸術論を形成したという仮説を提唱し、これを文献学、作品分析を通して論証する。

②　ファン・ゴッホがアルルで「ユートピア＝日本」を実現しようとしたことは、國府寺司(Kôdera Tsukasa, “Japan as primitivistic utopia: Van Gogh’s japonisme portraits, *Simiolus*, 14, no.3-4.,pp.1289-208.)によって指摘されてきたし、ゴーギャンがタヒチに求めた反文明世界というユートピアについては、エリザベス・チャイルズ（Elizabeth C. Childs, *Vanishing*

Paradise, Art and exoticism in colonial Tahiti, Berkeley, Los Angeles &London, University of California,Press, 2013）などによって明らかにされ、研究者の間で共通の認識となっている。しかし、両者がユートピア芸術論を構想するにあたって、彼らの先輩であるセザンヌが南仏エクス･アン･プロヴァンスで創始したユートピア芸術論が起源となっていることは、これまで、誰一人として指摘しておらず、この問題を、3 者の交流関係（特に、パリのタンギー爺さんのブティックを拠点とした交流）に関する実証研究や 3 者の書簡研究の成果を参照しつつ立証する。

③産業革命以後に浸透した資本主義に立脚した近代化社会に対するアンチテーゼとして生まれたアナキズム思想と反近代化思想の誕生と成長という環境を 3 人の画家が共有することで、ユートピア芸術論が共通の芸術論として形成された事を明らかにする。3 者の書簡や同時代の証言を精読して彼らが反近代化思想を表明した言葉を探し出す。

④「反近代化」から「ユートピア芸術論」を形成していった心理的メカニスムとして、彼らと同時代のゲオルク・ジンメル（Georg Simmel）が提唱し、現代においては、ハンス・ブルーメンベルク（Hans Blumenberg）が継承して哲学的な問題として議論した「慰め（Trost)」という自己保存のための社会的態度が働いていた事を、ジンメル、ブルーメンベルクの著作を精読することで明らかにする。

⑤ 3 者の「ユートピア芸術論」の形成を「場所論」から明らかにする。「場所」が芸術家達の創造のエンジン（創造的触媒）となるという議論は、フランス近代美術研究の分野では、近年、ホットな視点である（例えば、永井隆則『＜場所＞で読み解くフランス近代美術』(三元社、2016 年)）。本研究も、「場所論」を導入して、彼らが、ユートピア芸術論を形成するにあたって、彼らが制作した「場所」（風土、文化、気候等）が大きな要因として働いていた事を立証する。セザンヌ（エクス・アン・プロヴァンス)、ファン・ゴッホ（アルル)、ゴーギャン（ブルターニュ地方と南太平洋）といった関係であるが、これらの「場所」に赴いて、具体的に数点の作品を事例として選びながら、それらの構想に「場所」がどのように介在したかを明らかにする（例えば、セザンヌ＜水浴図＞連作とエクス･アン･プロヴァンス、ゴーギャン＜説教の後の幻影＞とポン･タヴェン、ゴッホ＜跳ね橋＞、＜夜のカフェ＞とアルルなど)。そのために現地調査旅行を行う。

「場所」、作品、資料調査計画
　平成 31(2019)：セザンヌのユートピアであるエクス・アン・プロヴァンス、ファン・ゴッホのユートピアであるアルルで現地調査し、パリのオルセー美術館とエクス・アン・プロヴァンスのグラネ美術館で、セザンヌ、ファン・ゴッホの作品調査を行う。
エクス・アン・プロヴァンスで開催されるセザンヌ・シンポジウムで「セザンヌとジャズ・ド・ブッファン一親密さの表象」と題して発表しセザンヌ研究者と意見交換、情報交換を行う。
令和 5（2023)：ゴーギャンのユートピアであるブルターニュ地方のポン＝タヴェンとル・プルデュでゴーギャンの描いた風景、彫刻や建物を調査する。カンペール美術館とポン＝タヴェン美術館所蔵のゴーギャン作品、ル･プルデュのマリー･アンリの宿で描いたゴーギャンの絵を調査する。パリのオルセー美術館で開催中の「ゴッホ展」でゴッホ作品を調査する。

⑥西洋美術に於ける「ユートピア世界の表象」の歴史を美術全集、主要美術館で確認する。本研究は、ポスト印象派の「ユートピア芸術論」が西洋美術の伝統から生まれたという仮説に立ってそれを論証することを目標としてはいないが、「ユートピア表象」の歴史を踏まえておく事で、彼らの「ユートピア芸術論」の構想が、近代という特殊な時代に規定されて誕生しながらも、普遍的な試みであった事を明らかにする。具体的には、プッサン、ヴァトー、シャバンヌの作品、ウイリアム・モリスの思想について調査する。

⑦最終的に、一見、各自の個性を探究したかに見える 3 人の画家は、実は、「ユートピア芸術論」を通して連帯し、現実を肯定し享受した印象派を乗り越える共同作業を世紀末に行っていたことを明らかにし、「個人主義美学」として語られてきた近代美術を「集団美学」の視点から捉え直す新しい近代芸術論の可能性を提唱する。

⑧ 2019 年～2021 年まで毎年、民間の助成金を申請し国内外の研究者を招いて国際シンポジウム「美術における＜ユートピア＞の表象」を開催する。国内外のポスト印象派の研究者と意見交換、情報交換を行って本研究に広がりと深さを得るよう試みる。

⑨科研の最終年度に民間の出版助成金を申請して国際シンポジウムの登壇者の発表内容を論文

集として発表し本研究の成果を公開する。

４．研究成果

研究の結果、以下の諸点を成果として挙げることができる：

① ポスト印象派（ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌなど）が彼らの生きた時代や社会に疑問を抱き生きづらさを感じる中で、その解決策としてユートピアを求めて近代化の進むパリから逃れて、南フランス、ブルターニュ地方やタヒチ島で制作し現地の風景や事物に着想を得てユートピア絵画を構想した事を明らかにした。彼らが活動したのは 19 世紀末だが、19 世紀初頭から始まった近代化の矛盾や弊害が表面化してきた正にその時、彼らがユートピア絵画を描いたことから、過去に描かれたユートピア絵画、文学や思想書と同様、彼らのユートピアは社会との関係の中で構想されたと言える。その意味で、一見、彼らは自らの社会から逃避したかに見えるが批判的な形での社会参加であった事が明らかとなった。

② ポスト印象派（印象派の後 1880－90 年代に展開した世紀末の芸術現象全般を指す）の中でもその出発点となった狭義のポスト印象派（セザンヌ、ファン・ゴッホ、ゴーギャン）において、ユートピア芸術論が一種の共同作業として形成されたこと、新古典主義の「集団美学」を否定したロマン主義以降、専ら「個性」や「独創性」の追求として語られてきた近代主義（modernism）の言説、換言すれば「個人主義美学」の言説とは反対に、3 人の画家のみならず世紀末の近代美術の展開においてユートピア芸術論という「集団美学」が大きな役割を果たしていたことを明らかにし新しい近代芸術論の可能性を提唱した。

③ 2019 年から 2021 年まで本科研の関連事業として毎年、計 3 回、国際シンポジウムを実施した。シンポジウム登壇者 11 名（内、イギリス人 1 名、アメリカ人 2 名、フランス人 2 名、スイス人 1 名）に加えて当該テーマに関心を持つ 4 名（内、フランス人 1 名）、計 15 名の 研究者に参加を呼び掛けて、6 年間（コロナのため 2 年間延長）の研究成果を論文集として公開すべく出版助成金を申請して採択された。2025 年 8 月に刊行予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　4件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 永井隆則	４．巻 16
２．論文標題 セザンヌ、装飾、モダン・デザイン、建築	５．発行年 2024年
３．雑誌名 学術報告書　（Bulletin of Kyoto Institute of Technology）』（京都工芸繊維大学紀要）	６．最初と最後の頁 19,50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井隆則	４．巻 48
２．論文標題 藤原禎朗著『共和国の美術-フランス美術史編纂と保守/学芸員の時代』　（名古屋大学出版会、2023年）	５．発行年 2024年
３．雑誌名 美術フォーラム21	６．最初と最後の頁 102,105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Takanori NAGAI	４．巻 15
２．論文標題 La theorie de l'art chez Cezanne dans sa correspondace	５．発行年 2023年
３．雑誌名 BULLETIN OF KYOTO INSTITUTE OF TECHNOLOGY	６．最初と最後の頁 1 25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Takanori NAGAI	４．巻 14
２．論文標題 L ’ idee de l ’ anti-modernisation sociale chez Cezanne	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『学術報告書（Bulletin of Kyoto Institute of Technology）』（京都工芸繊維大学紀要）	６．最初と最後の頁 71,107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Takanori NAGAI	4．巻 なし
2．論文標題 Cezanne’s Arcadia-Provence	5．発行年 2021年
3．雑誌名 La page d’accueil de la societe de Paul Cezanne(オンライン)	6．最初と最後の頁 不明
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Takanori NAGAI	4．巻 0
2．論文標題 Zola accuse par sa plume, Cezanne par son pinceau	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Les actes du colloque international :Peut-on parler d’une amitie creative entre Cezanne et Zola ? (https://www.societe-cezanne.fr/2020/05/06/zola-accuse-par-sa-plume-cezanne-par-son-pinceau/)	6．最初と最後の頁 n.p.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 永井隆則	4．巻 年報第37号別冊
2．論文標題 セザンヌ芸術の展開にジャズ・ド・ブッファンのセザンヌ家旧邸を中心とするエクス・アン・プロヴァンスの環境がもたらした創造的作用に関する研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 鹿島美術研究	6．最初と最後の頁 646、650
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永井隆則	4．巻 42号
2．論文標題 セザンヌ・コレクションの社会学	5．発行年 2020年
3．雑誌名 美術フォーラム21	6．最初と最後の頁 28、35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takanori NAGAI	4．巻 24
2．論文標題 Cezanne chez Gauguin	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国際版『美学』 Aesthetics （オンライン版）	6．最初と最後の頁 27、46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 永井隆則	4．巻 第38号
2．論文標題 書の美学とフランス近代美術	5．発行年 2019年
3．雑誌名 美術フォーラム21	6．最初と最後の頁 57,64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takanori NAGAI	4．巻 1
2．論文標題 Cezanne et Jas de Bouffan-Representatio;sentation de l’intimite	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Les actes du colloque international:Cezanne,Jas de Bouffan-Art et Histoire	6．最初と最後の頁 1, 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 永井隆則
2．発表標題 セザンヌとキリスト教
3．学会等名 京都美術史学会（招待講演）
4．発表年 2024年

１．発表者名 永井隆則
２．発表標題 マティスとデザイン
３．学会等名 日仏美術学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 永井隆則
２．発表標題 「セザンヌと社会」
３．学会等名 「芸術と社会」第 17 回研究会（京都大学人文科学研究所主催）
４．発表年 2022年

１．発表者名 永井隆則
２．発表標題 セザンヌとキリスト教
３．学会等名 第 21 回新約聖書図像研究会例会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Takanori NAGAI
２．発表標題 Cezanne et Jas de Bouffan-Representation;sentation de l’intimite
３．学会等名 Societe Paul Cezanne（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計7件

1．著者名 永井隆則	4．発行年 2024年
2．出版社 森和社	5．総ページ数 480
3．書名 『芸術と社会ー近代における創造活動の諸相ー』高階絵里加/竹内幸絵編、森和社、2024年12月	

1．著者名 Takanori NAGAI	4．発行年 2021年
2．出版社 Wiley, New York	5．総ページ数 640
3．書名 A Companion to Impressionism,ed. by Andre Dombrowski	

1．著者名 永井隆則	4．発行年 2022年
2．出版社 三元社	5．総ページ数 880
3．書名 絵画における真実ー近代化社会に対するセザンヌの実践の意味	

1．著者名 永井隆則	4．発行年 2020年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 735
3．書名 美学の事典	

１．著者名 永井隆則	４．発行年 2019年
２．出版社 朝日新聞社	５．総ページ数 264
３．書名 『コートールド美術館展　魅惑の印象派』（共著）	

１．著者名 永井隆則	４．発行年 2020年
２．出版社 読売新聞社	５．総ページ数 333
３．書名 『ロンドン・ナショナル・ギャラリー展』（共著）	

１．著者名 大髙保二郎/永井隆則	４．発行年 2020年
２．出版社 三元社	５．総ページ数 471
３．書名 『ピカソと人類の美術』（共著）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ポスト印象派におけるユートピアの表象
https://sfj-art.org/?p=420
西洋美術におけるユートピアの表象
https://sfj-art.org/?p=63
ポスト印象派から後世代に継承されたユートピアの表象
https://sfj-art.org/?p=1023

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 Colloque international : L’heritage utopique de Cezanne, van Gogh et Gauguin a Signac, et a Matisse	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 国際シンポジウム 「ポスト印象派におけるユートピアの表象－セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン」	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関